

フィクションあるいは物語としての食物

松本ユキ

まず、食物についての物語から今日のテーマ「飢えについて書く」ことを考えてみましょう。そこで、私が2010年に中国四川省成都を訪れたときのエピソードを少しお話したいと思います。友人と成都の繁華街を歩いていた私は、観光疲れから、何か甘くて冷たいものが飲みたくなり、露店でタピオカミルクティーを買いました。しばらくの間歩きながら飲んでいたのですが、あまりの甘さに飽きてしまい、まだ残っている飲みかけのミルクティーをゴミ箱に捨てました。すると、後ろから四人ほどの少年たちが物凄い速さでゴミ箱へと駆け寄り、プラスチックの容器を取り出しました。現実の苦さを忘れさせてくれるような甘い液体は、日本人旅行者の手を離れて、現地の少年たちに譲渡されていきました。

その成都の繁華街は、日系スーパーのイトーヨーカドーもあり、グローバルな資本主義経済のもたらす繁栄や富を象徴するような場所でした。私にとって中国の発展の裏側にある「飢え」を目の当たりにした瞬間であり、今まで多くの旅行者や一時滞在者がこのような風景の中に、他者のまなざしを発見してきたのでしょうか。また、タピオカミルクティーは、台湾発祥のグローバルな飲み物です。日本やアメリカの若者にとっては、手頃でオシャレな飲料であるタピオカミルクティーを消費することは一種の文化的ステータスであり、日常の中の贅沢である一方、中国の路上で生活する少年にとって、その残り物を手に入れることは、贅沢ではなく恥を捨てて生存するための必要性であったのかもしれない。

成都の商業中心地でおこぼれを探す少年たちのように、加速するグローバル化がもたらす「豊かさ」から取り残される放浪者、亡命者、難民、移民たちの声は、モニク・トゥルンの小説が一貫して追い求めているものと重なる気がします。少年たちがいるのは中国だけではありません。豊かさの裏にある「飢え」はあらゆるところに点在しています。『ブック・オブ・ソルト』の中には、ヴェトナムの市場でフォーのおこぼれを食べて、飢えをしのいでいる少年たちが登場します。一杯のボウルを分け合うことは、フランス人料理人のブレリオの視点では、血のつながっていない少年たちを家族にする儀式の一種として捉えられます。一方、ブレリオを市場に案内する主人公のビンは、少年たちの親密さから、貧しさや恥を読み取っています。

同じ茶碗の残りものを分け合う少年たちを見たら、誰もが兄弟だと思わないだろうか？サイゴンに来て間もないブレリオは、貧しさゆえに親密さを示し合うという行為が墮落をも意味することがわからなかった。この市場では同じ茶碗から食べるという行為は同じ鍋に放尿するのも同じで、とくに最初にそれを行う者には大差ないはずなのだが、そんなことはブレリオの関知するところではなかった。(『ブック・オブ・ソルト』小林訳 172)

本日の講演にもありましたように、同じテーブルで食事をすることはコミュニティーや家族

を形成するパフォーマンスな行為であり、それゆえにその背後にある植民地化された他者の飢えや苦しみに対する植民者のまなざしを垣間見ることのできる風景であるといえます。

「私たちは飢えについて理解してはじめて、食物のもつ力や意味を理解することができる。」という言葉は今一度考えてみましょう。この文脈において、飢えや食物というのは単に物質的、身体的なものではなく、精神的なものも含んだ比喩的なものであると捉えることができます。作品の中での「飢え」は様々なものを象徴しています。空腹を満たすための食物だけではなく、自分の心を豊かにしてくれる言葉、寒さから身を守ってくれる温もり、孤独な自分を救い出してくれる愛であったりします。パリで寒さ、飢え、孤独にうちひしがれる主人公ビンの姿は、カルロス・ブロサンの『わが心のアメリカ』で大恐慌のアメリカを彷徨っているフィリピン系アメリカ人労働者を思わせます。アメリカで結核と闘病する主人公カルロスは、アメリカ人女性から渡された本をむさぼるように読みます。彼にとって、「知識と愛情への飽くなき飢え」(Bulosan 236)は、孤独や貧困に苦しむアメリカでの生活を生き抜くための活力となります。

カルロスの場合、読書を精神の糧とし、作家となることを目指したのに対して、ビンは料理人としての自己を確立することで「飢え」を満たそうとします。Wenyng Xuは、アジア系アメリカ研究と食の関係に焦点を当てた著書、*Eating Identities*において、トゥルンの作品における「舌」は、言語と味覚の重なりを象徴しており、食物が主体の構築を促すという側面を提示しているとしています。しかしながら、「植民者の内部にいるエグザイルとして、住み込みで雇われている料理人として、セクシュアル・マイノリティとして、ビンが主体性を行使できる場所はごく限られており、料理が唯一、彼にとって楽しんで自己決定し、自尊心を保つことのできる領域である。」(Xu 140)と指摘しています。つまり、「食べる」という行為は、自己を形成し、自身の居場所や地位を獲得するための「職」と大いに関係しており、同時に異物を取り込むことで他者と同化していくことに伴う苦痛や恥などを象徴しているといえるでしょう。

二作目『ビター・イン・ザ・マウス』では、アメリカの南部で養子として育ったヴェトナム系の少女リンダが、誰とも共有することのできない共感覚を抱えて生きていく様子を描いています。共感覚とは、言語に対する卓越した感覚であり、リンダの場合、味覚を介して言葉を読み、聞き、話します。家族やコミュニティーにおいても自分自身をよそ者として感じている彼女は、誰かに自分の秘密の感覚を理解してもらうことを渴望しています。小説の背景は異なりますが、彼女の抱えているこのような精神的飢えは、前作の主人公ビンがフランスで味わっているほどの苦さと重なっています。前述したように、リンダとビンにとっての精神の飢えは、「食べる」とことと「話す」とことの重なりを象徴する「舌」によって表象されています。この文脈において、精神の飢えを満たす食物は、物語あるいはフィクションとしての食物であり、誰かとその物語を共有することで飢えに伴う自分の苦痛や恥をさらけ出すことであり、それによって同時に自分の物語を共有する家族や共同体とのつながりを形成していくことであるような気がします。

ご講演において次回作の冒頭部分を朗読していただきましたが、みなさんもすでにその作品の世界に引きこまれてしまったのではないかと思います。『ブック・オブ・ソルト』ではヴェトナム移民ビンの声を西洋のモダニズムとは違った視点から語るという挑戦がされていますし、『ビター・イン・ザ・マウス』では、共感覚という題材を通じてヴェトナム系アメリカ人の物語を描き出すことで、南部小説というジャンルに新たな一面が付与されていました。次回作は、4

人の女性の声を通じて紡ぎだされるラフカディオ・ハーンの世界であるとのことですが、重層的な空間や時間のなかで、「飢えについて書く」というテーマをより一層探求していかれることでしょうか。

最後に三点ほど質問をさせていただきたく、私のレスポンスを締めくくりたいと思います。最初の質問は、食物と文学についてです。アメリカ社会において、料理本の出版などアジア系アメリカ人と食物の関係は関心を集めてきましたが、学術研究はあまりなされてきませんでした（*Eating Asian America* 4）。特に、文学における食物についてはあまり研究されていません。フィクションにおいて食べ物はどのような役割を果たしているとお考えでしょうか？そして、次に、飢えと創作の関係について伺いたいです。以前に、アメリカ文学と食についてのシンポジウムで発表した際に、文学創作におけるアルコール、食欲減退、食物の不在、飢えと創作意欲との関係性が比例しているのではないかという議論ができました。このような飢えと書くこととの関連性について作家であるモニク・トゥルンさんがどのように捉えていらっしゃるのかが気になります。最後に、次回作では、ラフカディオ・ハーンと四人の女性について描かれるとのことですが、四人の女性の声をどのような手法で語られるのでしょうか？今までの作品とは違う点や新しく挑戦したいと考えていらっしゃることはおありでしょうか？

参考文献

- Bulosan, Carlos. *America Is in the Heart*. Seattle: University of Washington Press, 1946.
- Ku, Robert Ji-Song, Martin F. Manalansan IV, and Anita Mannur, eds. *Eating Asian America: A Food Studies Reader*. New York: New York University Press, 2013.
- Truong, Monique. *The Book of Salt*. New York: Mariner Books, 2003.
- . *Bitter in the Mouth*. New York: Random House, 2010.
- Xu, Wenying. *Eating Identities: Reading Food in Asian American Literature*. Honolulu: University of Hawaii Press, 2008.
- トゥルン, モニク 『ブック・オブ・ソルト』 小林富久子訳, 彩流社, 2012.

